

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成
——予備調査による尺度の改訂——

小山 慎治・池田 裕

Developing a Japanese *Enryo-Sasshi*
Communication Scale:
Revising a Trial Version of a Scale
Based on Results of a Pilot Survey

KOYAMA Shinji and IKEDA Yutaka

Toward exploring Japanese *Enryo-Sasshi* communication based human behavior with empirical evidence, the authors attempted to develop a Japanese *Enryo-Sasshi* communication scale. This scale is expected to measure to what extent a person psychologically supports *Enryo-Sasshi* communication when he or she interacts with others. This paper aims to report the results of a pilot survey conducted by the authors in order to check the internal consistency of a trial version of the scale. Data from 174 samples was obtained and statistically processed. The results of the statistical analysis indicated: (1) most of the items tended to measure the same construct measured by the other scale items since those individual items positively correlated to the sum of the score; (2) at least two items appeared to be inappropriate for assessing one's behavior since they showed low correlation value with the total score on the scale; and (3) the internal consistency or the reliability of the whole scale was not sufficient (Cronbach's $\alpha = 0.59$) even when the two items with low correlation value were excluded. Based on these results and with regard to the results of factor analysis which was conducted to observe the potential factors of the scale, the authors suggest a revised version of the scale consisting of 25 items.

キーワード： 遠慮・察しコミュニケーション、心理測定尺度、予備調査

1. はじめに

日本語学習者が、日本人とのコミュニケーションにおいて、その言語表現の曖昧さに困惑したという話をよく耳にする。例えば、上級レベルの学習者が日本人に依頼をした際に、その依頼を承諾してもらえたのか否かの判断に困ったり、自分自身が依頼をされている際に依頼されているということになかなか気づかなかつたりと、日本語の文法や語彙などの知識とは異なる次元で困難さを感じるという類のものだ。このような誤解の要因の1つとして考えられる文化の相違と言語行動との関連を明らかにしていきたいとの思いが、本研究を思い立った動機である。

このように曖昧だとされる日本人のコミュニケーションのあり方を説明する概念の1つとして、Ishii(1984)による「遠慮・察しコミュニケーション」がある。一般に日本人は、ある言語メッセージを発信するとき、メッセージの受け手の置かれた物理的・心理的環境を考慮して、その意図が言外に伝わることを無意識に期待しながら言語メッセージを送る。その際には言語メッセージは減量化や形式化により曖昧に表現される。また、メッセージの受け手も、送り手の「遠慮」の結果として生じた曖昧なメッセージを「察し」によって意味を補って解釈する(Ishii, 1984; 石井, 1996)。しかしながら、遠慮・察しコミュニケーションが日本人にどの程度支持され、実際にどのようになされているのか、その実態は十分に明らかにされていない。この実態を明らかにするために、何らかの形で「遠慮」「察し」に関するデータを収集し、それに基づく考察が必要であろう。そこで、日本人が「遠慮」「察し」を支持する度合いを測定する心理測定尺度を作成し、量的な分析を試みようと考えた。本稿では、その取り組みの一步として小山(2010)により作成された試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を用いた予備調査の結果を報告する。この調査結果の分析に基づき、試作版尺度の評価と改訂版尺度を示す。

2. 研究の背景

2-1. 遠慮・察しコミュニケーション

前述の通り、日本人のコミュニケーションの特徴の1つは言語メッセージの減量化や形式化によるメッセージの曖昧化である。また手塚（1993）によれば、日本人の理想的なコミュニケーションは「言わなくてもわかる」ことであり、「遠慮」と「察し」には「一方が合わせれば、もう一方も合わせる」という「相互同調性」が働く。特に「察し」については、「遠慮」を補完する役割があり、話し手と聞き手の相互補完が日本人のコミュニケーションを効果的にすると述べている。さらに石黒（2006）によれば、「察し」の内包的な意味は「推し量ること」、「(他者を) おもいやること」、そして「事情をのみこむこと」であり、「他者への共感、同情心」および「状況への配慮、受け入れ」という「自分以外の存在への配慮」があるとされる。これらから、遠慮・察しコミュニケーションは、調和的な対人関係の維持を前提として、一方が摩擦を回避するために本来の意図を曖昧化した言語メッセージの意味を、他方が非言語メッセージおよび社会的な文脈に依存することにより補完し、お互いが本来の意図を共有するプロセスであると考えられる。

例えば他者からの依頼を断るような場合、直接的な言語表現により断ることは両者の対立を明確にする可能性がある。そのため、このような状況では、依頼を断る側は言語メッセージを曖昧化し、婉曲な言語表現や気が進まない様子話し振りからその意図が相手に伝わることを期待する。依頼した側が、相手がなぜそのような表現や話し振りをしているのか、その背景を推察することができれば、両者は依頼した側が望むような結果にはなりえないという事実を穏便のうちに共有することになり、明示的な言語メッセージのやりとりをすることなしに意味の共有が達成されるのである。

2-2. 曖昧化生起の過程

「遠慮・察しコミュニケーション」の概念をより明確にするために、試論として「遠慮」のような曖昧化を伴う言語行動が生起する過程を図1に

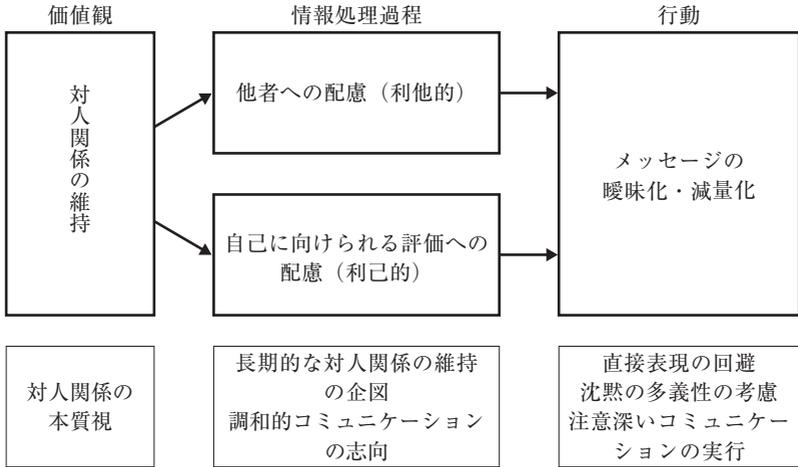


図1 曖昧化生起の過程と尺度に関わる諸概念

示す。図1においては、矢印により行動の生起する順序を示している。したがって、図における「価値観」として示されている「対人関係の維持」が動因となり、それに基づく「情報処理過程」を経て、メッセージの曖昧化もしくは減量化という「行動」が表出されるということになる。

まず対人関係を維持することが行動の前提となる。Ishii (1984) によれば、他者を傷つけたり、和を乱したりすることを恐れることが「遠慮」と「察し」の背景にある。つまり、言語表現を曖昧化する動機には日本人の対人関係観が影響していると考えられる。

日本人の対人関係を考察するにあたり、濱口(1982)は「間人(かんじん)」と呼ばれる対人関係モデルを提示している。間人とは、人間が人間のあり方を認識する際に、自主体と客体との関係を含めて自己を対象化する人間の類型であり、対人関係の中に身を置くことによって自己の存在を自ら規定する。このような間人主義の属性は、社会において相互扶助が不可欠であるとの認識である「相互依存主義」、相手はきっと自分の言動の意図を察してうまく対処してくれるはずだという「相互信頼主義」、および、既存の間柄はそれ自体値打ちのあるもので、利己的対処は望ましくないと

いう「対人関係の本質視」である(濱口・古川、1987)。さらに濱口(2003)も、日本文化の社会編成原理は他者に対する信頼であると指摘している。他者を思いやったり、他者との良好な関係を脅かしたりするような行為を避けようとするということ、またこれらを他者にも期待することは、遠慮・察しコミュニケーションを考える上で欠かせないだろう。

次に情報処理過程では、前述の価値観に基づき調和的コミュニケーションを志向し、長期的な対人関係を維持するという判断をする。相手に負担を強いる場面における直接的な言語表現は、相手の気分を害する可能性があり、それにより対人関係に悪影響をおよぼす可能性がある。その結果、本来は相手に負担を強いるような意図を持っていても、言語表現上はそう見せないよう言葉を濁したり、いかようにもとれるような曖昧な表現を他者に解釈を委ねたりすることにより、メッセージの受け手自身の自己決定であるという形を演出するのである。

一般に日本における丁寧さの表現として考えられる「謙遜」もこの例の1つだ。村上・石黒(2005)は社会規範に基づく低い自己評価の呈示を「謙遜」とし、社会心理学的な側面からその生起過程を研究している。この研究では謙遜の生起は社会規範によるというより、個人の心理的態度によることが示唆されている。自身の謙遜行動、あるいは他者の謙遜行動を認識しそれを修正して受けとめる行動(持ち上げ行動)が生起する要因は、本人がそれらの行動を支持するか否かによる。また、他者が謙遜を支持している場合、自分の心理的態度の如何にかかわらず自分も謙遜「してみせる」必要があるという。ここには、丁寧であろうとする際、他者への配慮という利他的な動機と、自己の評価を下げないという利己的な動機とがともに働いていると考えられる。おそらく遠慮・察しコミュニケーションにも同様な動機が働き、この動機を満たす方略として言語表現の曖昧化という行動が企図されるのではないだろうか。

最後に、曖昧化、もしくは減量化された言語表現が生起するのである。例えば先に挙げた謙遜表現を例にとると、本当はよくできているのに「今日のテストはまあまあだった」と表現するように、文脈から謙遜だと判断できるもの(吉富2007)がそれだ。そしてこのような例は、他者から褒め

られた場合の応答において(大野 2005)や、断りの表現として(目黒 1994)や、贈答の場面において(清 1995)など、様々な状況で見られる。また池田他(2008)は、他者に負担を強いる言語行動である「依頼」について注目し、その研究において日本人は「言い差し」や間接的な表現を使い、直接的な依頼表現をしないことにより丁寧さを示すと報告している。

このように、まず対人関係を維持することを考え、良好な関係を脅かすような行為を避け、他者との調和的な関係を維持するために曖昧な表現が生起すると考えられる。それは直接的な表現を回避し、沈黙の多義性を考慮し、注意深くコミュニケーションを実行するという形で現れると考えた。メッセージの受け手が遠慮・察しコミュニケーションを支持するならば、このような一連の心理的なプロセスを推論することで、生起した曖昧な表現に込められた意図を「察する」ことができるであろう。

2-3. 試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」

前述した曖昧化生起の過程を踏まえ、小山(2010)は全24項目から成る試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を示している(表1)。この心理測定尺度は、遠慮と察しに基づくコミュニケーションのあり方を支持するか否かを6つの観点から測定しようというものである。

尺度は、言語メッセージの減量および形式化による曖昧化という特徴を反映させた(1)「直接的表現の回避」、(2)「沈黙の多義性」、相手の年齢や地位や関係の深さに配慮した言動に関する(3)「注意深いコミュニケーション」を含む。また、遠慮・察しコミュニケーションが支持される背景にあると考えられる対人関係の維持に関わる項目も設けている。この対人関係観は、対人関係を自分では操作しえない無条件に尊いものとし、つねに相手の身になって対処すべきだという(4)「対人関係の本質視」、利他的および利己的の両面から対人関係を良好に保とうと考える(5)「長期的な対人関係の維持」、および(6)「調和的コミュニケーション」である。

尺度の構成にあたり、表1に示された6つの観点は、それぞれ同数の項目を含むよう配慮されている。まず、曖昧化されたメッセージの授受に関わる項目は、3つの構成概念それぞれに「遠慮」に相当するメッセージの

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

表1 試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」項目一覧

曖昧なメッセージの送受信	
(直接的表現の回避)	
逆 私は、相手に対して言いにくいことでも、率直な表現によって伝えようとする。	(送信)
私は、相手に対して言いたいことを言葉には表現せず、それが表情や話しぶりから伝わることを期待する。	(送信)
私は、直接的に言われないうちでさえ、相手が何を意味しているか理解できる。	(受信)
私は、相手の表情や話しぶりから、言葉には表現されていない微妙な含みを理解できる。	(受信)
(沈黙の多義性)	
私は、自分の真意を気づかせるために、意図的に沈黙を作る。	(送信)
私は、相手の言動に納得していないとき、沈黙する。	(送信)
会話中に相手が沈黙した場合、私はその沈黙の意味を考える。	(受信)
逆 私は会話中の沈黙は好きではない。	(受信)
(注意深いコミュニケーション)	
私は、自分の言おうとしていることが相手に失礼でないかどうか考える。	(送信)
逆 私は、人と話している時に感情的になるようなことがあったら、感情をありのままに表現する。	(送信)
私は、相手が私に気を遣っているかどうかにか敏感だ。	(受信)
相手をはっきりと言わない時、私はより注意深く相手の真意を推し量ろうとする。	(受信)
対人関係観	
(対人関係の本質観)	
逆 相手が自分の役に立たなければ、付き合いを続けていても意味がないと思う。	(利他的動機)
逆 社交的な会合は、何らかの見返りのために出るものだと思う。	(利他的動機)
人付き合いなしには心豊かな生活は送れないと思う。	(利他的動機)

(前頁から続く)

自分ひとりがどう生きるかということより、みんなと一緒にどう生きるかということのほうが大切だと思う。(利他的動機)

(長期的な対人関係の維持)

対人関係における問題は、すぐに解決できなくてもいずれ解決できるものだと思う。(利他的動機)

いちど人と関わったら、その人との関係は些細なことでは壊せないと思う。(利他的動機)

逆 自分の発言により対人関係が壊れる可能性があっても、自己主張をする。(利己的動機)

対人関係において無理に自分の意見を通すことは、長い目で見れば損だと思う。(利己的動機)

(調和的コミュニケーション)

私は、つまらない話をながながと続ける相手に対して、その話を興味深く聞いてあげる。(利他的動機)

逆 私は、曖昧な態度をとる相手は受け入れようとしない。(利他的動機)

私は、嫌いな相手とつきあう時には、相手に対して自分の本心が伝わらないようにする。(利己的動機)

私は、相手に対して反対意見を持っていても、それを表現せず抑えてその人に協調しようとする。(利己的動機)

送信に関わる項目と、「察し」に相当する受信に関わる項目を配した。各概念につき、メッセージの送信と受信それぞれにつき2項目ずつ配し、計12項目により構成される。一方、人関係観に関わる項目は、利他的な動機に基づく対人関係観に関する8項目と、利己的な動機に基づく対人関係観に関する4項目の計12項目であった。この試作版尺度を用いる場合、各項目について支持できるか否かを問い、それぞれの項目を支持する度合いを点数化しそれらを合計することにより、遠慮・察しコミュニケーションを支持する度合いが測定できると考えられる。

なお尺度の項目は、「直接表現の回避」、「注意深いコミュニケーション」

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

に関しては下田・田中(2006)によって示された項目を¹⁾、「沈黙の多義性」については佐々木(2002)の項目²⁾および下田・田中(2006)による「沈黙の肯定的解釈因子」の項目を参考にした。「対人関係の本質視」に関する項目は、柿本(1995)の項目³⁾を、「調和的コミュニケーション」は小山・川島(2001)により得られた因子に含まれる項目⁴⁾を参考に、それぞれ表現上の修正を加えて構成した。なお、「長期的な対人関係の維持」は小山(2010)で新たに作成された項目である。

3. 調査

3-1. 手続き

本研究では、試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を用い、各項目について6件法によりそれぞれの項目を支持する度合いを尋ね得点化した。調査票においては、上記24項目の、他者とのやりとりや振る舞いに関する記述および対人関係に関わる価値観に関する記述があり、それらに対し「全く当てはまらない」、「当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「やや当てはまる」、「当てはまる」、「非常によく当てはまる」の6つのうち回答者の考えに近いものを1つだけ選んでもらった。「全く当てはまらない」を1点、「非常によく当てはまる」を6点とし、この得点が高いほど遠慮・察しコミュニケーションを支持する度合いが高くなるよう処理した。したがって、尺度の得点は最低点が24点、最高点が144点ということになる。なお、逆転項目については、「全く当てはまらない」を6点、「非常によく当てはまる」を1点のように、得点を逆に処理している。

3-2. 標本

調査は関東の3つの大学で2009年6月から7月にかけて行われた。調査票を配布し、学生およびその家族から回答を得た。コミュニケーション関連科目の授業において、調査の趣旨を説明した上で協力者を募り、協力を了承してくれた学生に調査票を渡し自宅に持ち帰ってもらい、被調査者自身が回答を記入する形式で質問に答えてもらった。さらに家族の協力が

得られる場合には家族の分の調査票も持ち帰ってもらい、これらを翌週の授業において回収した。調査票の配布数 255 部に対し回収部数は 207 であった。このうち留学生による回答 21 部と未回答項目のあった 12 部を除き、174 の標本を得た(有効回収率 68.23%)。

学生の標本数は 153、平均年齢は 19.70 歳(標準偏差 1.26)であり、男女比は男性 64 に対し女性 89 であった。一方、彼らの親(または祖父母)の世代の標本数は 21、平均年齢 53.43 歳(標準偏差 8.54)であり、男女比は男性 5 に対し女性 16 であった。

4. 結果と考察

4-1. 尺度の得点の傾向

4-1-1. 標本について

今回の予備調査における尺度の平均点は、94.53(標準偏差 0.69)であった(表 2)。まず、質問紙の回答傾向に年齢層や性別による差があるかどうか確認するため、尺度の総合点、下位尺度の合計点、各質問項目の得点の平均を比較した。年齢層(前述の学生標本 153 とその親や祖父母の標本 21)による差を t 検定により分析した結果、尺度の総合点に有意差はなかった(両側検定: $t(172) = 0.58, n. s.$ 、表 3)。また下位尺度および各質問項目の平均点にも有意差はなかった。ただし、唯一「私は、直接的に言われなときでさえ、相手が何を意味しているか理解できる」という項目にのみ有意傾向(両側検定: $t(172) = 1.96, 0.05 < p < 0.10$)がみられた。さらに男女差に関しても同様の分析を行ったところ、総合点において有意差はなく(両側検定: $t(172) = 0.69, n. s.$ 、表 4)、すべての下位尺度、質問項目においても有意差は見られなかった。総じて尺度の得点は年齢層や性別により左右されないと判断できる。したがって、今回の予備調査の分析においては標本全体を 1 つの分析対象とみなすこととした。

4-1-2. 尺度の下位項目

次に、得られた回答から尺度の内的一貫性を検討するため、I-T 相関分

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

表2 尺度総合点の平均と標準偏差

平均	標準偏差	標本数
94.53	0.69	174

表3 尺度の平均、標準偏差と t 値 (年代間の比較、N = 174)

学生			親 (祖父母)			t 値
平均	標準偏差	標本数	平均	標準偏差	標本数	
94.67	9.11	153	93.48	8.92	21	0.58 <i>n.s.</i>

表4 尺度の平均、標準偏差と t 値 (男女間の比較、N = 174)

男性			女性			t 値
平均	標準偏差	標本数	平均	標準偏差	標本数	
93.94	10.14	69	94.91	8.33	105	0.69 <i>n.s.</i>

析をおこなった(表5)。この分析の目的は、各質問項目個別の得点と尺度の総合点との相関分析をすることで、各質問項目の得点が尺度全体の得点と同様の傾向を示しているか確認することである。表5をみると、すべての項目、下位尺度におけるピアソンの相関係数(r)が正の値をとっており、少なくとも尺度全体で測定しようとする概念と相反する傾向を示す項目がないことがわかる。

表5の「下位尺度と総合点の相関2」を見ると、下位尺度における「直接的表現の回避」($r=0.64, p < 0.01$)、「注意深いコミュニケーション」($r=0.56, p < 0.01$)、「対人関係の本質視」($r=0.43, p < 0.01$)、「長期的な対人関係の維持」($r=0.53, p < 0.01$)、「調和的コミュニケーション」($r=0.58, p < 0.01$)と総合得点との間に中程度の正の相関がある。この結果から、尺度における内の一貫性が示唆される。よって、これらの概念は、構成概念として妥当であると考えられる。一方、「沈黙の多義性」は低い正の相関は確認されたものの($r=0.32, p < 0.01$)、値が相対的に低いことから、他の概念に比べ構成概念として妥当かどうか疑問の余地がある。この概念に含まれる各項目を見ると、いずれも相関が低く、とりわけ「私は会話中の沈黙は好きではない(逆転項目)」の項目は相関がない($r=0.11, p < 0.05$)。

表5 I-T 相関分析の結果

曖昧なメッセージの送受信		各項目 と総合 点の相 関 (r)	下位尺 度と総 合点の 相関 1 (r)	下位尺 度と総 合点の 相関 2 (r)	
(直接的表現の回避)					
逆	私は、相手に対して言いにくいことでも、率直な表現によって伝えようとする。	(送信)	0.34**		
	私は、相手に対して言いたいことを言葉には表現せず、それが表情や話しぶりから伝わることを期待する。	(送信)	0.35**	0.44**	
	私は、直接的に言われないときでさえ、相手が何を意味しているか理解できる。	(受信)	0.35**		0.64**
	私は、相手の表情や話しぶりから、言葉には表現されていない微妙な含みを理解できる。	(受信)	0.43**	0.42**	
(沈黙の多義性)					
逆	私は、自分の真意を気づかせるために、意図的に沈黙を作る。	(送信)	0.23**		
	私は、相手の言動に納得していないとき、沈黙する。	(送信)	0.22**	0.29**	
	会話中に相手が沈黙した場合、私はその沈黙の意味を考える。	(受信)	0.22**		0.32**
	私は会話中の沈黙は好きではない。	(受信)	0.11*	0.23**	
(注意深いコミュニケーション)					
逆	私は、自分の言おうとしていることが相手に失礼でないかどうか考える。	(送信)	0.48**		
	私は、人と話している時に感情的になるようなことがあったら、感情をありのままに表現する。	(送信)	0.27**	0.48**	
	私は、相手が私に気を遣っているかどうかにかに敏感だ。	(受信)	0.25**		0.56**
	相手をはっきりと言わない時、私はより注意深く相手の真意を推し量ろうとする。	(受信)	0.36**	0.37**	

対人関係観	
(対人関係の本質視)	
逆	相手が自分の役に立たなければ、付き合いを続けていても意味がないと思う。(利他的動機) 0.27**
逆	社交的な会合は、何らかの見返りのために出るものだと思う。(利他的動機) 0.16
	----- 0.43**
	人付き合いなしには心豊かな生活は送れないと思う。(利他的動機) 0.21**
	自分ひとりがどう生きるかということより、みんなと一緒にどう生きるかということのほうが大切だと思う。(利他的動機) 0.35**
(長期的な対人関係の維持)	
	対人関係における問題は、すぐに解決できなくてもいずれ解決できるものだと思う。(利他的動機) 0.25**
	----- 0.34**
	いちど人と関わったら、その人との関係は些細なことでは壊せないと思う。(利他的動機) 0.28**
	----- 0.53**
逆	自分の発言により対人関係が壊れる可能性があっても、自己主張をする。(利己的動機) 0.42**
	----- 0.43**
	対人関係において無理に自分の意見を通すことは、長い目で見れば損だと思う。(利己的動機) 0.24**
(調和的コミュニケーション)	
	私は、つまらない話をながながと続ける相手に対して、その話を興味深く聞いてあげる。(利他的動機) 0.38**
	----- 0.48**
逆	私は、曖昧な態度をとる相手は受け入れようとする。(利他的動機) 0.32**
	----- 0.58**
	私は、嫌いな相手とつきあう時には、相手に対して自分の本心が伝わらないようにする。(利己的動機) 0.35**
	----- 0.49**
	私は、相手に対して反対意見を持っていても、それを表現せずに抑えてその人に協調しようとする。(利己的動機) 0.44**

注) ** は 1%水準で有意を表す。

* は 5%水準で有意を表す。

表5における「下位尺度と総合点の相関1」を見ると、「曖昧なメッセージの送受信」に含まれる3つの各下位尺度のうち、メッセージの送信に関わるものとして作成されたそれぞれの項目およびメッセージの受信に関わるものとして作成されたそれぞれ項目と、総合点との間に正の相関が確認された。同様に、「対人関係観」に含まれる3つの下位尺度に関しても、利己的動機に基づくとした項目、利他的動機に基づくとした項目それぞれが、総合点と正の相関を示している。これにより、遠慮・察しコミュニケーションが生起する要因として他者を思いやることや、自分の評価を下げないことがともに含まれることが示唆された。

このように、全ての項目が尺度の総合点と正の相関を示すことから、試作版尺度が一元尺度として機能する可能性が窺える。現段階において、尺度自体の妥当性を確認することはできないが、遠慮・察しコミュニケーションに関わりそうな項目の収集および作成により構成された尺度が、何らかの心理的傾向を測定しうることを確認できたことには意義があるだろう。

一方、各項目で総合点との相関がない項目が2つあった。1つは前述の「私は会話中の沈黙は好きではない(逆転項目)」であり($r=0.11, p < 0.05$)、もう1つは「対人関係の本質観」における項目「社交的な会合は何らかの見返りを期待して参加するものだと思う(逆転項目)」であった($r=0.16, n. s.$)。注目すべきは、これら2つの項目がともに逆転項目である点である。この理由として考えられるのは、本来の項目の記述を逆転項目にすることにより、その項目の質問文が分かりにくくなってしまったということである。質問の内容がわかりにくかったり、答えにくかったりする場合、どのような質問であっても同意する傾向を示すといういわゆる黙従傾向が生じやすい。そこで1つの可能性として考えられるのは、逆転項目の記述が曖昧で、質問の意図を理解した上で回答した者と、意図が十分に伝わらず黙従傾向が働いた者がいたということだ。これにより筆者が期待していた回答と逆の傾向を示す回答とがあり、その結果として回答傾向の一部が相殺され、相関が低く出たということである。したがって、これらの項目を改善するためには、ワーディングの見直しが必要だと考えられる。

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

さらに「私は会話中の沈黙は好きではない(逆転項目)」については、そもそもこの項目を設けること自体が妥当ではないという見方もできる。この項目は、高コンテクストなメッセージにおける「沈黙の肯定的解釈因子」に分類される項目を参考として作成されたものだ。しかし、本来遠慮・察しコミュニケーションは相手に心理的な負担を強いるような状況において生起しやすいと考えられるものであるため、そのような状況における沈黙が、果たして肯定的に解釈されるものであるのか否かを問い直す必要があるだろう。

4-2. 尺度の信頼性

今回使用した試作版尺度の内の一貫性を示すクロンバックのアルファ係数は、全 24 項目の場合、0.55 であり、尺度の総合点との相関がなかった 2 項目を除外した場合は 0.59 であった(表 6)。いずれにしても、心理測定尺度の信頼性の指標としては十分とは言えない。

今後は、各項目が総合点とより高い相関を示すよう工夫する必要がある。まず考えられることは、今回相関が低かった項目を新たに作成した項目と差し替えた上で調査を行い、その中からよい項目を吟味することである。結果的に総合点との相関が高かった項目を採用することで、尺度の内の一貫性は高められるだろう。

また、今回の項目のワーディングの見直しも必要であろう。回答の際に多くの回答者に遠慮・察しが生起する典型的な場面を想起し、それに基づき回答してもらうことが大切である。そのためには、ワーディングを推敲し各項目の精度をより高めていくことが求められる。

表 6 クロンバックのアルファ係数

全 24 項目	22 項目 (総合点との相関がなかった項目を除外)
0.55	0.59

4-3. 尺度に内在する変数

ワーディングをより具体的でわかりやすいものにするには、どのような場面をイメージさせることを狙うべきなのか、具体的な指針が必要だ。そこで今回の試作版尺度の回答の傾向に内在する変数を確認するため、尺度の因子構造を確認することにした。因子分析という手法は、1つの仮説の可能性を示しているに過ぎないという方法論的な限界も内包されるが、抽出された因子は今後尺度のワーディングを推敲する際の1つの指標となるであろう。なお分析に際し、総合点と相関がみられなかった前述の2項目は除外した。

主成分法による因子分析を行い、5因子から8因子までの結果を得た。このうち、6因子の場合がもっとも因子帰属がはっきりすると判断し、6因子を採用することとした(表7)。

第1の因子は、「直接的表現の回避」、および「注意深いコミュニケーション」に関わる項目から構成され、かつメッセージの受信を想定した項目を多く含むことから「注意深いメッセージ解釈因子」とすることにした。

第2因子に含まれる項目は、「直接性の回避」(発信)、「注意深いコミュニケーション」(発信)、「調和的コミュニケーション」(利他的動機)、「長期的な対人関係の維持」(利己的動機)と、それぞれが筆者の当初想定した構成概念をばらばらに含む結果となった。それぞれの項目を見なおしてみると、自分の言いたいことや感情をそのままに表現しようとせず、また、他者の曖昧な態度も受け入れるというものであると思われる。よって第2因子を「曖昧さへの寛容性因子」とした。

第3因子は、3項目中2項目が「調和的コミュニケーション」に関わる項目であった。それぞれの項目は、他者との調和を重視する傾向を反映させようと考えられたものであるが、それぞれから見て取れるのは、他人を傷つけまいとする様子である。また、「沈黙の多義性」の項目も相手の態度への配慮ともとれる項目であることから、第3因子は「他者の面子への配慮因子」とすることとした。

第4因子は、「直接表現の回避」(発信)、「注意深いコミュニケーション」(発信)、「沈黙の多義性」(発信および受信)、「長期的な対人関係の維持」

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

表7 尺度の因子構造

	I	II	III	IV	V	VI	共通性
注意深いメッセージ解釈因子							
私は、直接的に言われなきときでさえ、相手が何を意味しているか理解できる。	.780	-.064	-.089	-.109	.075	.185	.673
私は、相手の表情や話しぶりから、言葉には表現されていない微妙な含みを理解できる。	.826	-.078	-.018	.126	.005	.230	.758
私は、相手が私に気を遣っているかどうかにかんじて敏感だ。	.692	-.034	.131	-.043	.077	-.253	.569
相手ははっきりと言わない時、私はより注意深く相手の真意を推し量ろうとする。	.635	.015	.123	.158	-.038	.019	.445
曖昧さへの寛容性因子							
逆 私は、相手に対して言いにくいことでも、率直な表現によって伝えようとする。	-.053	.687	.015	.138	.050	-.267	.568
逆 私は、人と話している時に感情的になるようなことがあったら、感情をありのままに表現する。	.119	.517	.100	-.309	-.263	.045	.458
逆 私は、曖昧な態度をとる相手は受け入れようとしなない。	-.185	.600	-.058	.188	.113	.150	.468
私は、相手に対して反対意見を持っていても、それを表現せずに抑えてその人に協調しようとする。	-.012	.510	.456	.094	-.020	.208	.521
逆 自分の発言により対人関係が壊れる可能性があっても、自己主張をする。	-.029	.716	.111	-.150	.097	.087	.566
他者の面子への配慮因子							
会話中に相手が沈黙した場合、私はその沈黙の意味を考える。	.298	-.103	.591	.072	-.169	-.254	.546
私は、つまらない話をながながと続ける相手に対して、その話を興味深く聞いてあげる。	-.042	-.061	.683	.003	.154	.251	.558
私は、嫌いな相手とつきあう時には、相手に対して自分の本心が伝わらないようにする。	.030	.214	.651	-.026	.051	.027	.475

(前頁から続く)

注意深いメッセージの生成因子

私は、相手に対して言いたいことを言葉には表現せず、それが表情や話しぶりから伝わることを期待する。	-.025	.338	-.060	.659	-.024	-.047	.555
私は、自分の言おうとしていることが相手に失礼でないかどうか考える。	.334	.381	.168	.439	-.042	.103	.490
私は、自分の真意を気づかせるために、意図的に沈黙を作る。	.115	-.332	.085	.698	-.081	-.017	.625
私は、相手の言動に納得していないとき、沈黙する。	-.090	-.047	.281	.358	.073	-.391	.376
対人関係における問題は、すぐに解決できなくてもいずれ解決できるものだと思う。	.036	-.019	-.327	.420	.370	.172	.452

他者とのつながり因子

逆 相手が自分の役に立たなければ、付き合いを続けていても意味がないと思う。	-.168	.234	-.040	-.166	.688	.089	.593
人付き合いなしには心豊かな生活は送れないと思う。	.244	-.104	-.027	.105	.646	-.226	.551
いちど人と関わったら、その人との関係は些細なことでは壊せないと思う。	.019	-.008	.155	.010	.557	.168	.364

集団への帰属因子

自分ひとりがどう生きるかということより、みんなと一緒にどう生きるかということのほうが大切だと思う。	.173	.073	.107	-.040	.249	.601	.472
対人関係において無理に自分の意見を通すことは、長い目で見れば損だと思う。	-.025	-.026	.077	.069	-.032	.675	.468

因子寄与	2.793	2.651	1.778	1.695	1.402	1.230	11.549
因子寄与率 (%)	12.697	12.050	8.081	7.070	6.374	5.590	52.499

注) 回転後因子負荷量(主成分分析法、6因子、Kaiserの正規化を伴うエカマックス回転)

(利他的動機)に関わるとする項目を含む。それぞれの項目は、コミュニケーションにおける技能についてよく考え、他者との関係性も考慮に入れ

るといふもののようである。このようにコミュニケーションに関わる様々な要素に対する気配りをしている様子から考え、第4因子を「注意深いメッセージの生成因子」とした。

第5因子および第6因子は、ともに「対人関係の本質視」と「長期的な対人関係の維持」に関わる項目を含んでいる。それぞれが対人関係のありかたについての項目であるが、第5因子は「付き合い」の重視がみて取れる一方、第6因子は所属する集団や他者との関係性に関わる項目であるように思われた。よって、第5因子を「他者とのつながり因子」とし、第6因子を「集団への帰属因子」と解釈した。

因子分析の結果、2つの項目が複数の因子への帰属をしめしていることがわかった。1つは「注意深いメッセージの生成因子」の「私は、相手の言動に納得していないときに沈黙する」という項目である（因子負荷0.358）。この項目は、「集団への帰属因子」にも関連性をしめしている。ただし、因子負荷は-0.391と負の値をとっているが、絶対値では第4因子よりも強い関連性を示している。また、「曖昧さへの寛容性因子」に含まれる「私は、相手に対して反対意見を持っていても、それを表現せずに抑えてその人に協調しようとする」の項目（因子負荷0.510）も「他者の面子への配慮因子」にも0.456の因子負荷を示しており、帰属が曖昧であると考えられる。

このように、今回の試作版尺度における各項目同士の関わりは、6つの因子により説明できる。ただし、帰属に曖昧さが確認された2項目については見直しが必要だ。それぞれの帰属する因子の特徴をより明確に反映させることで、尺度の項目としての精度が高められるのではないかと思われる。

次に、興味深い点は、試作版尺度の作成にあたり想定した「沈黙の多義性」にかかわる項目が、異なる因子に帰属していることである。前掲の表5のように、もともとこの概念に関わる項目により構成される下位尺度と尺度の総合点との相関はあまり高くない。われわれは、実生活においてある意図をもって沈黙をすることもあるだろうし、会話の最中の沈黙を否定的に捉えず容認することもあるかもしれないが、沈黙を意図的なメッセージとして使うという場面はさほど多くはないのかもしれない。このように

考えると、沈黙を遠慮・察しコミュニケーションを測定する観点とする筆者の考え方は、日本文化における沈黙の意味を過大に評価したものであったのかもしれない。このように考えるなら、尺度の修正案としては、これらの沈黙に関わる項目を削除してしまうことである。しかしながら、因子分析の結果を踏まえるなら、これらの項目が異なる因子にそれぞれ帰属するものだと考えを改めるほうが現実的だ。したがって、沈黙に関わる項目は、今回得られた6因子それぞれの属性を考慮したワーディングに修正するべきであろう。

4.4. 教示について

また、統計の結果から示唆された課題以外の修正点もある。それは質問紙に回答する際に思い浮かべる人物についてである。そもそも筆者は心理的もしくは物理的に他者に負担を強いるような状況において遠慮・察しコミュニケーションが生じやすいとしながら、調査票の回答においてはどのような状況を想定して答えるべきか、何も教示を与えなかった。ある回答者が、誰を思い浮かべるかによって回答が異なるといった趣旨のメモ書きを調査票に残しており、回答者おのおのが思い思いの人物を想定して質問に回答していたことが窺えた。例えば、気の置けない友人を想定しながら回答していた人と、目上の人物を想定して回答した人とは、遠慮する必要性に差があることが考えられ、その結果として回答の傾向が変わることが考えられる。このようなバイアスを排除するためにも、日頃から関わりがあるさほど親しくない特定の人物を一人思い浮かべて回答してもらうなど、教示のしかたに工夫が必要であろう。

5. 改訂版尺度の作成

筆者は、因子分析の結果を踏まえ遠慮・察しコミュニケーションの支持の度合いを測定する際の観点到修正を加えることにした。具体的には、因子分析の結果として抽出された6因子、すなわち「注意深いメッセージ解釈」、「曖昧さへの寛容性」、「他者の面子への配慮」、「注意深いメッセージの生成」、「他者とのつながり」、「集団への帰属」を新たな観点としようとした。

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

しかしながら、これら6つの観点から尺度を構成すると、1つ問題が生じる。それは、前節で示したように教示のしかたを改めた場合、試作版尺度における「対人関係の本質視」に関わる質問項目に修正が必要となることである。この観点から従来の尺度に含められた質問項目は、それぞれ「相手が自分の役に立たなければ、付き合いを続けていても意味がないと思う」、「社交的な会合は、何らかの見返りのために出るものだと思う〈逆〉」、「人付き合いなしには心豊かな生活は送れないと思う〈逆〉」、および「自分ひとりがどう生きるかということより、みんなと一緒にどう生きるかということのほうが大切だと思う」であり、特定の個人との関係に関するものもあるが、ほとんどが対人関係全般を考慮して回答するものである。このため、教示を改めると、教示と質問項目に齟齬が生じることになってしまうのである。そこで、この問題を解決するために、試作版尺度におけるこれらの項目が含まれる因子「他者とのつながり」と「集団への帰属」2つの因子を1つのまとまりとみなし、暫定的に「他者への信頼」として新たな観点として、1対1の対人関係に即した質問項目を用意することとした。具体的には、「人付き合いなしには心豊かな生活は送れないと思う〈逆〉」、「自分ひとりがどう生きるかということより、みんなと一緒にどう生きるかということのほうが大切だと思う」、「対人関係において無理に自分の意見を通すことは、長い目で見れば損だと思う」の3項目を削除し、「誠意をもって接すれば、相手とは通じ合えると思う」、「私は、相手の立場に立ってものを考えるようにしている」、「ある程度相手に負担のかかる依頼をすることは、人間関係を悪くする可能性がある〈逆〉」の3つを加えた。

このような5つの観点から各質問項目のワーディングを精査し、より質問の場面が想起しやすくなるよう推敲した。これにより、尺度の内の一貫性が高まることが期待される。また、各観点の質問項目数をそろえるため、各観点の質問数がそれぞれ5つになるように質問項目を追加した。なお、新たに加えた「他者への信頼」の項目は、「対人関係の本質視」と同様に柿本(1995)による項目を一部参考とした。ワーディングの修正と、新たな項目を加えた全25項目の改訂版尺度を表8に示す。

表8 改訂版尺度の構成

試作版	改訂版
注意深いメッセージ解釈因子	注意深いメッセージ解釈(5項目)
私は、直接的に言われないうときでさえ、相手が何を意味しているか理解できる。	私は、直接的に言われないうときでさえ、相手が何を意図しているか理解できる。
私は、相手の表情や話しぶりから、言葉には表現されていない微妙な含みを理解できる。	私は、相手の話しぶりや表情から、言葉には表現されていないメッセージを理解できる。
私は、相手が私に気を遣っているかどうかにかに敏感だ。	私は、相手が私に気を遣っているかどうか分かる。
相手ははっきりと言わない時、私はより注意深く相手の真意を押し量ろうとする。	相手がどうしたいかをはっきりと言わない時、私はより注意深く相手の真意を押し量ろうとする。
	私は、相手に対して言いにくいことが自分の話しぶりや表情から伝わることを期待する。
曖昧さへの寛容性因子	曖昧さへの寛容性(5項目)
逆 私は、相手に対して言いにくいことでも、率直な表現によって伝えようとする。	逆 私は、相手に対して言いにくいことでも、率直な表現によって伝えようとする。
逆 私は、人と話している時に感情的になるようなことがあったら、感情をありのままに表現する。	逆 私は、相手と話している時に感情的になるようなことがあったら、その感情をありのままに出す。
逆 私は、曖昧な態度をとる相手は受け入れようとしないう。	私は、相手が曖昧な態度をとっても平気だ。
私は、相手に対して反対意見を持っていても、それを表現せずに抑えてその人に協調しようとする。	私は、相手に対して反対意見を持っていても、それを抑えてその人に合わせようとする。
逆 自分の発言により対人関係が壊れる可能性があっても、自己主張をする。	相手と意見が違うと思われるとき、自分の態度を曖昧なままにしておく。
他者の面子への配慮因子	他者の面子への配慮(5項目)
会話中に相手が沈黙した場合、私はその沈黙の意味を考える。	会話中に相手が沈黙した場合、私はその沈黙に込められた意味を考える。

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

(前頁から続く)

私は、つまらない話をながながと続ける相手に対して、その話を興味深く聞いてあげる。

私は、相手がつまらない話を続けていても、嫌な素振りを見せずに聞くようにしている。

私は、嫌いな相手とつきあう時には、相手に対して自分の本心が伝わらないようにする。

私は、相手の言動が気に入らなかったとき、その気持ちが相手に伝わらないようにする。

相手との会話中に、相手が自分にどんな答えを期待しているかを考える。

逆 相手の考えに強く反対しても、その後の相手との関係に影響はないと思う。

注意深いメッセージの生成因子

私は、相手に対して言いたいことを言葉には表現せず、それが表情や話しぶりから伝わることを期待する。

注意深いメッセージの生成 (5項目)

私は、自分が不満に思っていることを口に出さず、沈黙することでそれが相手に伝わることを期待する。

私は、自分の言おうとしていることが相手に失礼でないかどうか考える。

私は、自分の言おうとしていることが相手に失礼でないかどうか考える。

私は、自分の真意を気づかせるために、意図的に沈黙を作る。

会話中に、自分の発言がその場に合っているかを考える。

私は、相手の言動に納得していないとき、沈黙する。

私は、会話中に、相手がその話題を嫌がっていないか考える。

対人関係における問題は、すぐに解決できなくてもいずれ解決できるものだと思う。

相手との間に問題が起きても、時間をかければ解決できると思う。

他者とのつながり因子

他者への信頼 (5項目)

逆 相手が自分の役に立たなければ、付き合いを続けていても意味がないと思う。

逆 相手が自分の役に立たなければ、付き合いを続けていても意味がないと思う。

人付き合いなしには心豊かな生活は送れないと思う。

誠意をもって接すれば、相手とは通じ合えると思う。

いちど人と関わったら、その人との関係は些細なことでは壊せないと思う。

一度関わった以上、相手とはできるだけよい関係を続けるべきだ。

私は、相手の立場に立ってもの考えるようにしている。

(前頁から続く)

集団への帰属因子

自分ひとりがどう生きるかということ 逆 ある程度相手に負担のかかる依頼をす
より、みんなと一緒にどう生きるかとい ることは、人間関係を悪くする可能性
うことのほうが大切だと思う。 がある。

対人関係において無理に自分の意見を
通すことは、長い目で見れば損だと思
う。

6. おわりに

本稿では、試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を用いた予備調査の結果から試作版尺度の評価をし、それに基づく改訂版尺度を示した。尺度の項目のうち全体との相関が低い項目を除外し、さらに因子分析で得られた因子の属性を考慮に入れることにより、ワーディングの修正、項目の差し替えを行った。今後の展望として、まず改訂版尺度による調査を行い、あらためて尺度の内的一貫性を確認することが必要だ。またその際には、質問紙における教示の変更の効果を確認するために、対人関係の親疎を統制し、親しい相手を想像して回答した場合と、比較的親しくない相手を想像して回答した場合とでその傾向に差が生じるかどうかを比較可能な形で調査を実施したい。これらを通じ尺度の精度を高めた後に、日本人の言語行動や言語表現が遠慮・察しの概念とどう関わるのかを明らかにしていきたい。

注

- 1) 「直接性の回避」および「注意深いコミュニケーション」の項目は、下田・田中(2006)が留学生の日本文化への適応を研究の過程で、Gudykunst他(1996)による「高-低コンテクスト」を測定する尺度(Communication Style Scale)を用いて日本人学生の傾向を調べる過程で見出した因子である。下田・田中(2006)による研究では、この2つの因子以外に、「感情の理解因子」、「誇張因子」、「コミュニケーションの正確性因子」、「沈黙の肯定的認知因子」、「感情の重視因子」、「間接的メッセージの理解因子」を含む8因子が見出されている。

「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成

これらのうち、「直接的表現の回避因子」、「注意深いコミュニケーション因子」、および「沈黙の肯定的認知因子」が「高コンテクスト」関連項目とされている。

- 2) 佐々木 (2002) は、日本人が対人コミュニケーションにおいて沈黙している間、どのような心理的なプロセスを経ているのか、自由記述で得られた回答から質問項目を作成し、これらの項目を支持するか否かを尋ねる質問紙調査を行っている。回答から得られた結果を因子分析し、潜在的な変数を検討した結果、沈黙の7つの機能を見出している。すなわち「メッセージ構成」、「合わせ」、「察し」、「ターンテイキング」、「話題選択」、「反論示唆」、「沈黙化」である。
- 3) 「対人関係の本質視」に関わる項目は、柿本 (1995) が英語簡略版「間人度」尺度を作成する過程でオリジナルの「間人度」尺度全36項目から因子負荷の小さい項目を除外して選定した20項目を参考にしてしている。なお、オリジナルの「間人度」尺度は、濱口・古川 (1987) による。
- 4) 「調和的コミュニケーション」の項目は小山・川島 (2001) で抽出された因子による。この研究では、Takai & Ohta (1994) の日本的コミュニケーション能力尺度 (Japanese Interpersonal Competence Scale) と Wiemann (1977) によるコミュニケーション能力尺度 (Communicative Competence Scale) を用いた調査を行っており、両者によるコミュニケーション能力の測定結果には正の相関があることからコミュニケーション能力には文化一般的な側面があるとする一方で、調和的な対人関係の維持が日本文化特有的なものである可能性を論じている。

付記

本稿は、日本コミュニケーション学会第40回記念大会にて口頭発表された内容に加筆・修正を加えたものである。なお本稿における報告は、平成22～24年度科学研究費補助金(C)「依頼の言語行動と『遠慮・察し』の意識」(課題番号: 2252054、研究代表者: 池田裕)の調査研究成果の一部である。

引用文献

- 池田裕・三好理英子・笠原ゆう子 (2008) 「依頼の言語行動——中国語・韓国語・英語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者を比較して——」『第8回国際日本語教育・日本語研究シンポジウム議事録』、211-217頁。
- 石井敏 (1996) 「対人関係と異文化コミュニケーション」古田暁 (監修) 『異文化コミュニケーション (改訂版)』 (121-140頁)、有斐閣。
- 石黒武人 (2006) 「多文化関係における日本的コミュニケーションの可能性——『察し』に内蔵された肯定的側面』『多文化関係学』3、151-160頁。
- 大野敬代 (2005) 「日本語における謙遜表現とその機能」『早稲田大学教育学部学術

- 研究(国語・国文学編)』53、47-59頁。
- 柿本敏克(1995)「英語版『間人度』尺度の作成とその検討」『山形県立米沢女子短期大学紀要』31、43-51頁。
- 小山慎治(2010)「試作版『遠慮・察しコミュニケーション尺度』の作成」『多摩留学生教育研究論集』7、9-14頁。
- 小山慎治・川島浩美(2001)「コミュニケーション能力の評価——評価者と尺度の文化的要因に関する実態調査——」『異文化コミュニケーション研究』13、15-29頁。
- 佐々木輝美(2002)「日本人の『間(ま)・コミュニケーション』の機能に関する研究」『獨協大学外国語教育研究』20、13-28頁。
- 下田薫菜・田中共子(2006)「日本人学生における集団主義-個人主義および高-低コンテクストと適応との関連」『多文化関係学』3、33-52頁。
- 清ルミ(2003)「『つまらないものですが』考——実態調査と日本語教科書との比較から——」『異文化コミュニケーション研究』15、17-39頁。
- 手塚千鶴子(1993)「『甘え』から見た日本人のコミュニケーションと異文化接触」『異文化コミュニケーション研究』6、21-44頁。
- 濱口恵俊(1982)「日本人の人間モデルと『間柄』」『大阪大学人間科学部紀要』8、207-240頁。
- 濱口恵俊(2003)「『間(あわい)の文化』と「独(ひとり)の文化」』知泉書館。
- 濱口恵俊・古川秀夫(1987)「日本人の対人関係観の特性——測定のための尺度構成をも目指して——」濱口恵俊(編)『日本人の基本的価値観に関する実験・調査研究(文部省科学研究費補助金 課題番号59450025研究成果報告書)』(22-46頁)、大阪大学人間科学部社会心理学研究室。
- 村上史朗・石黒格(2005)「謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果」『社会心理学研究』21、1-11頁。
- 目黒秋子(1994)「『謙遜型』断りのストラテジー」『東北大学文学部日本語学科論集』4、99-110頁。
- 吉富千恵(2007)「謙遜表現に関する多面的検討」『龍谷大学論集』469、138-168頁。
- Gudykunst, W. B., Matsumoto, Y., Ting-Toomey, S., Nishida, T., Kim, K., & Heyman, M. (1996). The influence of cultural individualism-collectivism, self-construals, and individual values on communication styles across cultures. *Human Communication Research*, 22, 510-543.
- Ishii, S. (1984). *Enryo-Sasshi* communication: A key to understanding Japanese Interpersonal relations. *Cross Currents*, II (1), 49-58.
- Takai, J., & Ohta, H. (1994). Assessing Japanese interpersonal communication competence. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
- Wiemann, J. M. (1977). Explication and test of model of communicative competence. *Human Communication Research*, 3, 195-213.